おしゃべりな真珠

今東光

講談社刊

おしゃべりな真珠

今 東 光

講談社刊

おしゃべりな真珠(しんじゅ)

昭和40年7月31日　第1刷発行

	著者	今(こん)　東(とう)　光(こう)
¥ 340	発行者	野　間　省　一
	印刷所	星野精版印刷株式会社
	製本所	黒柳製本株式会社

発行所　東京都文京区音羽町3一19　電話東京 942—1111(大代表)　株式会社 講談社

© TŌKŌ KON 1965. PRINTED IN JAPAN

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目

次

木馬は廻る　三
バンドネオンの歎き　一〇
わが路の落葉　一八
巣立ち　二五
仮面　三三
櫟荘　四一
婦人記者　四八
チワワ　五六
めぐり会い　六四
落花抄　七二
旅衣　七九
京の一夜　八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

恐ろしい跫音　九四
天才　一〇一
宝石店にて　二一〇
リカの生活と意見　二一八
秘密　二二五
喧嘩　二三三
別れもまた　二四〇
白浜　二四八
嗅覚の問題　二五六
意外な結論　二六四
奇禍　二七二
ここにも偏奇館　二八〇

はじめてのデート　一六八
それから　一九七
貸借について　二〇五
女戒　二二三
破局　二三一

装幀　藤井悠紀

おしゃべりな真珠

木馬は廻る

青い空には陽光がきらめき、とがった靴の先に陽炎が燃えている。制服の下に着込んだ下着に包まれた肌はじっとりと汗ばんでいた。若い女性が発汗すると、それが一種の体臭となって微妙な香気となるのだ。昔、清朝の乾隆皇帝という人の寵愛した香妃という女性は、入浴してさえその湯が匂ったと伝えられている。そのために帝の愛情がいよいよ深まったというのは人間にとって香いというものが意外に重大な役割を果しているということだ。

その目の前に五人の制服の女学生が溌剌とした肢態を見せながら、さしかかった。彼女等はあたりの人々が自分等に眼を注いでいることを眼中にもしないように振舞いながら、充分に見られている意識に上気さえしていた。彼女等は腰のひねり方、足の置き方、手のやり場を心得て、それぞれが絵になるようなポーズをとって佇んでいた。彼女等は見ていながら却って見られることに満足している風だった。

麹町にある私立のその高等学校はお洒落学校として男性の間に聞えていた。その制服もまた東京中の如何なる女学校とも比較にならないほどスマートだった。というのはこの学校の卒業生で、パリーに留学し、ディオールに学んだというデザイナーの考案だからだ。ディオール亡き後はカルダンの系統に属し、中性美といった風をねらっている新人だった。彼女の主張によると観世音菩薩という仏は、男性に非ず女性に非ず、中性美を象徴しているというのだ。男女ともに少年少女から青年と処女への中間期は、最も美しい中性美を発揮している点で観音様に近いという。彼女はその主張を婦人雑誌などにも発表して論争の渦を巻き起したほどだ。男の児の着るようなセーターを着て、すらりとした脚にスラックスを穿いた容姿は、少年と少女の区別のつかない妖しい美だと言いたい。乳房も発達して居らず、腰も細く、そのくせ飛び

あがるほど好奇心が強く、一番、刺激に脆弱な年頃だ。この時分が少女が一番体臭を放つ時期で、紅みがかった青い果物の甘い酸味は味覚の中で最も複雑なように、少年少女の開花期前の美しさを彼女は制服で表現した。そういう制服をつけている五人の高校の女生徒は、直ぐ自分達の後のベンチに腰かけて匂いの高い葉巻をくわえ、今時分には珍しいステッキに両手を重ねて好ましそうに眺めている紳士に気がついた。

年の頃は五十を幾つか越え、鬢のあたりには銀髪が交っていたが、眉毛の濃い、眼のぎょろりとした顔をして、口は楽しそうに綻んでいた。

「ちょっと。あのネクタイいかすわね」

「紳士もあの位でなくちゃ」

「あのステッキ知ってる」

「知らないでか。スネークウッドだよ」

「ふん。生ちゃんね」

「だって、あたしの彼なんかステッキ持つ柄じゃないの。パパのステッキを持ってごらんなさいって言ったら、それくらいなら蝙蝠傘を持つだって」

「へえ。チェンバレン張りね」

「そうなんだ。彼はイギリス紳士に憧れてんのよ」

「まあ。今どき珍しいじゃない。何でも彼でもフランス好みなのにさ」

「そうなのよ。彼の叔父さまがロンドンに行ってたのね。せんだって帰って来たらしいの。その話を聞いてからイギリス好きになったのね。だって今でもシティというロンドンの中心街じゃ若い男も山高帽をかぶって、必ず雨傘を持って歩いているんだって。そのくせ雨が降ると雨宿りをするんだってさ」

「どうでしょう」

「つまりイギリス人気質っていうのね。どんなパリーの流行も、世界的なアメリカ好みも受けつけないのね。頑固っていえば頑固だけど、ちょっと出来ない真似ね」

「それじゃ彼の紳士は」

「やっぱりイギリス風なんじゃない。今どきステッキなんか持ってるんだもの」

「老船長みたいね」

「あら。うまい観察だわ」

五人の娘等は小雀のように喋っている。それなのに彼女等は決して後を振り向うとしないのだ。若い女性が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

後を振り返ったりすることは恥辱だし、ましてじろじろ相手を観察することなんか許されない。彼女等の関心はあくまで前方にあるのだ。

その目の前には大きなメリー・ゴー・ランドがあった。はるか空に跳ねかえって音楽が聞え、黄と赤と青の大きなテントの下で、色とりどりの木馬が上下や前後に揺れながらゆるやかに廻っていた。白い木馬に男の児がまたがり、栗色の木馬には水兵服の女の児が乗っていたり、赤ん坊を抱いた若い母親が黒い木馬に乗り、それを若い夫がカメラにおさめ、熱いアベックは相乗りで抱き合っていた。彼女等は自分達も木馬に乗りに来たのだ。若い女性にとっては木馬館みたいな古風なものは既に魅力を喪っていた。それよりもスポーツカーを奔らせたり、若い男とオートバイを飛ばせたり、愛する人とヨットに乗ったりする方がより楽しい。

しかしながら親しい仲間、それも五人も連れ立って来ると、彼女等がもっと小さい時分に連れられてきた木馬館に対する郷愁がそこはかとなく湧いて来たのだ。面白いことはいま自分達の目の前をゆっくりと通り過ぎる木馬に対する感じは、昔とちっとも変っていないのだ。子供心にもどの馬にも乗せられて満足したのではなかった。見ているうちに馬の姿態、表情、色彩など気に入ったのに乗ったものだ。白い服の時は黒い木馬に乗り、赤いコートを着てる時には白い木馬に乗ったし、尻尾の抜け落ちた木馬は見向きもしなかったし、片眼の顔料が落剥した木馬は気味が悪かった。殆んどの馬には見られなかったが、二三頭の木馬には露わに雄の性器らしいものがあったのが恥しかった。その馬にはどうしても乗る気がしなかった。何故だかわからない。そのくせその木馬が来ると必ず雄の性器を素知らぬ振りをしながら見たものだ。

彼女等は自分が最も好きで乗った木馬をそれぞれ見て或る種の感慨に耽った。子供の頃に鋭敏にも感じた感覚は、この現在とも変っていないということは、感覚には進歩も発展もないのだろうかという疑問だ。あの時に厭らしいと感じた木馬は、今見ても矢張り厭らしいのだ。何だか雌馬を追いかけている性慾に顔を歪めた雄馬を連想するだけ背景を複雑にしただけで、その厭らしいという気分は今もって抜けていないのだ。勿論、感覚というものは幅の広いものでもなく、永続性があるとは見えな

い。けれども進歩も発展もないと決めて好いだろうか。
五人の娘等の目の前を仲の好い愛人らしい若い男女が腕を組んで通って行く。中にはお互いの手を背に廻してそれを握り合って静々と通り過ぎる。今に自分達にもそういう異性が現れて、まるで騎士のように介添えしてくれるに違いない。彼女等の豊かな想像力は大きな翼を伸してひろがって行くのだ。彼女等の従兄や、兄の友達や、仲間の兄弟などの顔を描いても、ちっとも似ていない。しかしながら確かにそれと目鼻立ちもはっきりしないのだ。
もう数十日の後に彼女等は学窓を巣立つのだ。今までのように日曜と祭日を除いて、毎日のように顔を合せることはなくなるのだ。自分達がどんな路を歩むかは世の中へ出てみなくてはわからない。それが一抹の不安だった。それだからといってそれは避けられないことだ。考えてみれば学生時代ほど朗らかに過せたのは、格別に社会の連帯責任といった風の重圧を感じなかったからだ。すくすくと育つことが出来たのは、何だか無責任だったからのような気がする。
彼女等はこの頃、毎日のように社会に出てからの話をした。一人前に振舞うためには何でも知っていなければならないのに、実はあまりに知らな過ぎるような気がした。
「映画を見ない」
明美が言い出したので放課後に仲好し五人は、学校から真直に家に帰らずに映画館のある街の方へ出かけて行った。
五人は映画の色彩の強い看板を仔細に見てから、額をあつめて相談した。すると蘭子は
「あんまり面白そうじゃないわね」
と抗議した。
「そうね。それじゃどんなのがある」
「まだ封切りしてないけど」
と言ってからフランス物の未封切の映画の筋を話した。
「それ、素晴らしそうね」
「とっても好いそうよ」
「早く見たいな」
「だけど少し猛烈らしいわよ」
「へえ。猛烈って、つまり恋愛の情感度が強いってこ

と」
「まあ、そうねえ」
彼等の足はいつの間にか映画館の前から、木馬館の方に移って来たのだ。すると幼い日の印象がありありとよみがえって来たのだ。
「木馬って素敵だったな」
リカが肩をゆすって言った。彼女は体操でも木馬を飛ぶのが巧かった。
「え。そうだったわね」
彼女等はバレーのように股を開いて木馬にまたがり、その木馬がさながら生き物のように動揺してくれたのが、とても楽しかったのを思い出した。この記憶は頭脳の中には残っていなくて、皮膚と筋肉に鮮明に残っていたのだ。
彼女等の注意を集めた紳士は、自分の網膜に映る木馬がゆるやかに回転して行くのを目で追いながら、その目の前に肩を並べている五人の無邪気で可愛らしい娘の運命もまた、この木馬のように回転しながら展開していくのではあるまいかと、興深く見ていた。この紳士のように人生を五十年も経験してくると、彼女等が自分達の木馬のような運命に何にも気づかずに居られるのを、むしろ羨やましく眺めていたのだ。
「奈々子は先刻から、あの紳士が気がかりなのね。どうしたの」
声をかけられると奈々子は急にどぎまぎした。
「別に」
すると加代子は肩までふっさりとかかった髪を揺りあげるようにして
「嘘。さっきから彼の紳士のことばかり気にしてたじゃない」
「そう見えた」
「えい。たしかにそうだったわ」
「だって好い伯父さまに見えやしない」
「あたしあの葉巻の匂いって好きよ。ハバナかしら、それともマニラかな」
リカが少し上向いた鼻をつんと突き出して、空気の中に混って漂う葉巻の匂いをくんくんと嗅ぐようにした。
「そんなら聞いてらっしゃいよ」
と蘭子がからかった。
「そりゃどっちだってかまわないけど、葉巻の匂いのす

る間に、木馬に乗らない」
とリカが誘った。
彼女はリカに従って札売り場で金を払うと、颯とスカートを風にひるがえしてそれぞれ好みの木馬にまたがった。
「うわあ。素敵じゃないの」
明美が木馬の尻を叩いて叫んだ。
その声は音楽と回転音のために掻き消されそうだったが、後の四人も活溌な態度で木馬に乗った。
「もう。卒業したらこんなこと出来ないわね」
加代子は感慨をこめて言った。
「その頃には木馬になんか乗るの子供臭いと思うだけよ。あなたは彼と腕を組んで銀座を歩く方が好きにきまってるわ」
またしても蘭子が素っ破ぬいた。
「覚えてらっしゃい。あなたは卒業してもリカと一緒に木馬に乗る勇気あるの」
「そうねえ。失恋でもしたら、きっと、独りで木馬に乗りに来るわね。しくしくと泣いてなんか居られない質だから」
と蘭子が言ったので皆な大笑いした。たしかに陽気な蘭子なら、たとえ失恋してもしねもねと拗ねたり、泣いたりするより、この木馬に乗って失恋の傷手を忘れようとするだろうし、また、恐らくけろりと忘れ得るような気がするのだ。
「あたしもその組だな」
とリカが言った。
「あたしは何遍、失恋したって、屹度、自分じゃ失恋したなんて思わないわね」
「それじゃどう思うの」
「さあ。何ていうのかしら。怪我をするのは女の方だって言うけど、必ずしもそうばかりも言えないと思うわ」
「だって相手の恋人に逃げられたら。それでも失恋じゃないと言えて」
「つまり、あたしは、あたしから逃げるような男を恋人にしないわよ。最初から」
「おう。凄い。あなたに会っちゃ、どんな恋人も奴隷みたいに」
「そう。そう。あたしからは逃げられないのよ。逃げられないようにしておくのが一番好いことよ」

「だけど一度も失恋の味を知らないってことは、人間味が足らないんじゃないかしら」

これは奈々子の意見だ。

この言葉は一瞬、彼女等を萎縮させた。誰もが一度は失恋の苦杯をなめなければ自分達の人生を開幕させることが出来ないとでもいうのか。

彼女等がむさぼるようにして読む恋愛小説や、経験のある大人達の話によると、人は必ずといって好いほど最初の恋には失恋するらしい。それが幼ければ幼いほどいじらしい失恋に泣かなければならないそうだ。しかしながら失恋とは何という甘美な情緒であろうか。

「彼女等は」

と紳士は葉巻の灰を落してから、ゆっくりと立ち上って考えた。

「木馬館の思い出を忘れるかもしれないが、木馬のような運命の軌跡から遁れることは出来ないだろう」

紳士がステッキをつきながら立ち去って行くと

「あら。あの方お帰りになるわ」

と思わず奈々子が言った。

彼女等もその声で紳士の方をはじめて見送った。紳士は次第に人混みの中に隠れて行った。奈々子は

（あの紳士には、もう一度、何所かでお会いするような気がするわ。忘れないためによく見ておこう）

と思っていつまでも見送っていた。何故そう思ったのかわからない。これほど多い東京の住人の中で、行きずりに会った人の印象を忘れないために、そうして再び邂逅するだろうという神秘的な予感のために、胴ぶるいすることなど有ることだろうか。奈々子は自分の不思議な感情を分析することが出来なかった。

明美は大きな欠伸をして、ごろりと長椅子の上に横になった。

静かな洋間で、その窓からは大森の海岸が昔は見えたそうだが、今では建物に遮られて見えないばかりか隣りの家や庭に続いて大きな煙突などまで目に入ってくる。この山王台には広壮な邸宅が多く明美の家も古風だがどっしりとした屋敷構えだ。

彼女の傍には外国や日本のファッションブックが散らばり、大きなスケッチブックには彼女の描きかけの素描があった。二三日前にお友達と木馬館へ行って子供のように木馬に乗って遊んできたが、その時に見かけた若い

女性のブラウス姿を記憶をたどって描いてみたが、巧く描けない。
「素晴らしいデザイナーになりたいな」
と口癖にいう明美は卒業したら銀座とパレスホテルに店を持っている中田女史について専門的に勉強するつもりだった。
「ママ。お茶を頂きたいわ」
明美は起きあがって扉を細目に開けると大きな声で叫んだ。
明美の母親は紅茶を淹れて持ってくると
「出来たの。デッサン」
「うまく描けない」
「そんなことじゃ駄目じゃないの。先生にお見せするのに」
「やっぱりモデルを使わなくっちゃ駄目ね。記憶なんて当にならないもん」
明美は駄々児のように言うと母親は
「あら。絵描きって記憶の好いものだって聞いたよ。ミレーは自分が散歩したところなど直ぐ描けたんだって」
「へえ。あの『アンジェラスの晩鐘』って絵を描いた人のこと」
「そう」
「田舎臭い絵よね」
「あんたにあっちゃ堪らないわ」
母親があきれたように言ったところへ
「お嬢さま。お電話です」
とお手伝いさんが顔を出した。明美は紅茶の茶盌を机の上に置くと駆けだして行った。

バンドネオンの歎き

扉を開けると、いきなりマヤ・カサビアンカの滑らかなフランス語の唄が耳に飛び込んできた。この唄は彼の好きなシャンソンだが本当はアルゼンチン・タンゴの「ラ・ノヴィア」の替え歌だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c